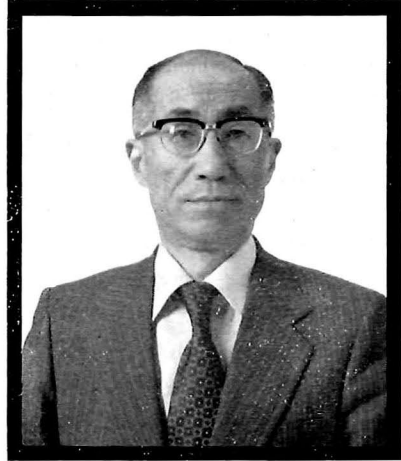


敬友 間 得之 先生の逝去を悼む

間 得之 略歴

大正13年 1月27日 岐阜県中津川市に生れる
 昭和23年 9月 東大医学部医学科卒業
 昭和24年12月 医師免許・東大物療内科入局
 昭和30年 5月 医学博士
 昭和42年度より 日本リウマチ学会評議員
 昭和42年 9月 静岡県厚生連中伊豆温泉病院院長
 昭和44年度より 日本リハビリテーション医学会評議員
 昭和44年度より 東京大学講師（非常勤）
 昭和46年—48年 第13回国際リウマチ学会組織委員、庶務担当幹事
 昭和51年度より 厚生省特定疾患「神経筋疾患リハビリテーション調査研究班」班員
 昭和51年度 東海四県農村医学会会長
 昭和54年度より 静岡県病院協会副会長
 昭和55年12月26日 逝去



中伊豆温泉病院院長 間 得之 先生は昭和 55 年 12 月 26 日、享年56歳で逝去されました。心からお悔み申し上げます。

故人を追悼する小文としては異例のことですが、故間先生を尊敬していた数多い友人の1人として、筆者の眼を通して敬友の生きざまを偲びたいと思います。

間 得之 先生はインターンを済ませてから昭和24年に東大物療内科に入局して故三沢敬義先生の門下生となりました。スマートで素直な青年は有能で頼もしい臨床家・研究者に忽ち育って行き、昭和30年には医学博士の学位を授与されています。間先生の臨床と研究の関心は当初から慢性関節リウマチを中心とするリウマチ病学にありましたが、やがてリウマチ患者の治療、ことに長期的な管理に絞られてきました。昭和42年に中伊豆温泉病院の初代院長として赴任する際に彼の考えたことは、後で G. Ehrlich の「関節炎患者の多面的管理」を筆者と2人が中心になって訳した際に伺うことができました。すなわち、日本で重要な脳卒中患者のリハビリテーションの他に、これまで理想として論じられていながら実現しなかったリウマチ患者の total management を現実のものとするものでした。間先生のプランは美事に開花し、リウマチ専門医による的確な診断と薬物療法、必要に応じた外科的アプローチ、各専門家の密な協力によるリハビリテーションが病院の特色になり、これまでには考えられなかったような治療成果が挙げられました。この間

の研究業績は日本リハビリテーション医学会と日本リウマチ学会のシンポジウムで4回にわたり発表され、さらにリハビリテーション医学会医師卒後研修会の主催者・講師として若手医師に植え継がれました。さて、困難とされていた理想が実現されたのは何故だったのでしょうか。それはリーダーとして深い造詣を持っていただけでなく、人間“間 得之”の立派さにあったのだと何の躊躇いもなくいえます。彼と知り合った人は誰でもその人間性に魅せられてしまいました。公人としての間先生は患者のことを深い学識を背景とした愛情で考え、学問を楽しみ、病院のスタッフ・友人のことは自分の事のように考えてくれました。私人としては正に理想的な夫・父であり、家族への愛情の深さに感銘したことも度々です。楽しい酒と美事な余技も交友を助けてくれました。

悲しいことに、ご家族・友人・病院スタッフの心からの願いも空しく、どの面からみても素晴らしい人、間 得之 先生の短い生涯が閉じられました。さぞ苦しかったと思いますが、苦しい一言もありませんでした。愚痴になりますが、せめて死ぬ前には我儘を云って欲しかったと思います。しかし、彼は多くの人の胸の中に長く生き続けるものと信じます。

ご冥福を祈り、涙と共に合掌。

東京大学保健センター

佐々木 智 也